
技術という名の力

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

技術という名の力

【Nコード】

N1771V

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

ぱたりと老人は懐中時計を閉じた。

「そろそろ時間じゃな」

老人はそう言うと、リビングに向かった。

ぱたりと老人は懐中時計を閉じた。

「そろそろ時間じゃな」

老人はそう言うと、リビングに向かった。

リビングにはバッテリーが切れて、動けなくなったアンドロイドが一体、テーブルの上に横たわっていた。

「一体僕が何をしたと言うのです。マスター」

「いいや、何もしたらんよ。お前は。いや、何もしたらんと言うのはおかしいな。お前には大分世話になったからな」

「でしたら、何故？」

老人はため息を一つ吐く。

「首都の方でアンドロイドが暴走して、一万人規模の犠牲者が出たからな。政府も政策転換して、脱アンドロイド政策に切り替わってしもうたからの」

「そんな・・・」

「すまんが国の政策じゃから、儂等にはどうする事も出来んのじゃ。そもそも儂等人間が人間みたいなものを作ろうとすること自体間違いじゃったかもしれん。それは神様の範疇で儂等人間には過ぎた力じゃったんじゃろ」

老人の言葉にアンドロイドは答えなかった。

言うべき言葉が見つからなかったのか。

それとも完全にバッテリーが切れ、ただの人形に戻ってしまったのか。

それは分からなかった。

程なく老人宅に業者がやってきて、アンドロイドを運び去った。

「行ってしまいました？」

静かになつたりリビングに老婆が姿を出す。

「ああ、行ったよ。これでいつ襲われるか分からないと言う恐怖か

「らやつと解放されるな」

「ええ、そうですね。けれど、あの子にはずいぶん助けられましたから、少し可哀そうな気がしますね」

「ああ、そうだな」

窓の外を眺めると、他の家からもアンドロイドが運び出され、トラックの荷台に放り込まれている様子が見える。

「あの子がいなくなって、これから私達の生活はどうなるのでしょうかね」

「不自由にはなるだろうな。けれど、命の危険は無くなるだろう」

「そう思えば、少しの不自由など仕方ないだろう」

「確かにその通りなのかもしれませんが、あの子は私達に尽くしてくれましたわ。もしかして本当はあの子は何も悪くないのじゃないかもしれませんか？」

「・・・もう何も言うな。夜も遅い。今夜は早く寝るとしよう」

「ええ。ええ、そうですね」

そして、夜の街では、用済みになった大量のアンドロイドを乗せ、トラックは走っていくのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1771v/>

技術という名の力

2011年10月9日17時43分発行